

日蓮宗寺院活動における

地域社会と大衆の問題

現宗研調査部主任

望 月 一 靖

は し が き

現代宗教研究所は、設立準備期間を含む過去四ヶ年にわたって、日蓮宗寺院活動及び、現代社会の諸問題についての各種の調査、及び予備調査を行ってきた。それらの成果についてはその都度レポートを作成し宗内に報告してきたのであるが、「所報」の創刊にあたってその概略を総括しつつ紹介し、若干の問題点をひろってみたいと思う。

すでに印刷物で調査報告がなされたものを含めて調査テーマは左記の通りのものである。

「庶民における日蓮像」

「日蓮宗寺院実態調査」

「日蓮宗社会事業実態調査」

「勝浦市における創価学会の進出状況について」

「宗教意識と道徳意識における世代間の差異の問題」

この調査レポートのうち「日蓮宗社会事業実態調査」は今回の総括には入らない。また「宗教意識と道徳意識における世代間の差異の問題」は、調査の過程に問題があったため結果にひずみを生じたのでその反省にとどまる。

一、大衆の意識

敗戦を契機として日本は文化変容の急激な潮流のなかに
なげ入れられた。政治、経済の構造変化と、それにともな
うあらゆる文化の実体は、価値体系の変革に激しく流動し
たのである。戦後における混乱はその流動状況の現象化し
たものであり、そのうちの八神々のラッシュアワー \vee と言
はれた宗教界の事情も、時代状況の外側になかったことを
意味している。八逆コース \vee とか八リバイバル \vee と云はれ
た旧体制への回帰願望が、風俗的文化現象にみられたこと
もあり、社会体制全体が復古的な傾向を帯びつつあるとい
う現在の状況下においても、なおかつ古い価値体系への現
实的回帰運動とはなり得ないでいる。なぜなら大衆の意識
状況は、総体的に新しい価値体系、すなわち民主主義理念
を定着化しつつあるからである。多くの問題をはらみなが
らもこれを日本的な文化変容としてとらえるところから、
新しい教団の課題が提起されなければならないのである。

しかしながら既成仏教諸教団における現在の問題は、この
文化変容にもなつて生起された時代の要請に応える態勢
を整備しえないで戦后二十年を経過して来たところにある
といえよう。それは教団の構造的機能が旧体制のままであ

るといっただけでなく、日本的な民主主義理念の定着化運動
とともに教団教学の現代的展開がなされなかったというこ
ろに本質的な問題点があったのだといえよう。

現宗研調査部はひとつは教団組織を支えている八寺院 \vee
の社会的機能が、現代の新しい社会状況の下でどのように
地域社会と有機的連関をもつて働いているかという問題と
教団を囲む大衆の意識がどのような構造をもっているのか
を問題として調査してきたのである。

1、庶民における「日蓮像」を巡して

日蓮系の新興諸宗教、特に靈友会、立正佼正会、創価学
会は、戦后多くの信者を「庶民」の中から獲得し、大きく
発展したことはあえて云うまでもないことであるが、この
「庶民」とは新興宗教の地盤であると同時に日本における
宗教及び思想の土壌ともいえるものである。この点におけ
る点をしばつて「東京都荒川区尾久町」をモデル地域とし、
「庶民における日蓮像」をテーマに、宗教的態度の実態と
日蓮像の關係を捉えようとした。

④ 日常生活における宗教的態度

庶民の日常生活において、宗教がどれほどの関心を占め
ているか、宗教がどれほど日常生活に滲透しているかを分
析していくことにする。

	(%)	15.4
宗 正 会	3.9	1.4
宗 正 会	0.4	0.4
宗 正 会	13.7	12.4
宗 正 会	11.2	9.8
宗 正 会	0.7	0.7
宗 正 会	0.4	0.4
宗 正 会	0.4	0.4
宗 正 会	0.4	0.4
宗 正 会	0.7	0.7
宗 正 会	16.0	12.3
宗 正 会	12.3	

「あなたの寺は何宗ですか」という問いに対する応えが右の表である。「わからない」「寺はない」は合計二八・三％であるが、これは自分の寺、または自分の家の寺がなものであるかわからない、または知らない人たちである。

次は「神棚と仏壇があるか」という問いに対して「両方ある」が二五・三％、「仏壇」が三六・一％、「神棚」が九・一％「ない」が二八・四％となっている。また「仏壇を拜む」が二六・四％「神棚を拜む」が五・六％「両方拜む」が一七・五％、「その他を拜む」を含めて「拜む」と応えたものが五〇・九％「拜まない」が二〇・七％「神棚や仏壇なし」が二八・四％となった。何らかの拜礼の対象をもつ七一・六％のうち、毎日拜まぬ者は二〇・七％であつて、毎日の礼拝という日常的な宗教態度を持する者は五〇・九％ということになる。毎日の礼拝ということのなかに習慣的・儀礼的な要素のあることを理解しておく必要が

ある。

次に信仰の有無となると、「信仰する宗教あり」と応えたものが全体の三三・七％であつて、そのうち仏教系が二八・七％である。更に日蓮宗の信徒は七・七％、日蓮正宗が一・二・六％という数字が現われている。

「その他」八・四％のうち、立正佼正会一・七％、霊友会〇・七％となつており、この地域における日蓮系の信者は圧倒的に多いことがこれで判明した。

この信仰をもつものを性別でみると、男より女が多く、年令は離れ方が多い。学歴は新制高、旧制中学出身者が低いことが目だっている。職業では、労務、主婦、自営、勤務の順である。

非信仰者に対して「今関心をもっている宗教」について質問を試みると次のようになる。まず「今関心をもっている宗教がありますか」という問いに対して

関心あり	20.6	%
日 蓮 宗	4.8	
キリスト教	2.7	
創 価 学 会	9.0	
立正佼正会	0.5	
不 明	3.7	
関心なし	79.4	%

特定の宗教団体の所属は、信仰者三三・八%のうち、二・八%が所属しているにとどまり、そのうちでは創価学会の一・八%、日蓮宗の三・五%、立正佼正会一・七%となっており、所属しない信仰者は一〇・九%となっている。

以上のことを要約すると次のようになる。

寺の宗派	知っている	71.7%	知らない	28.3%
神棚・仏壇	ある	71.6	ない	28.4
毎日の礼拝	する	50.9	しない	49.1
信仰する宗教	ある	33.7	ない	66.3
所属宗教団体	ある	22.8	ない	77.2

以上のことを基礎として特定の問題について設問する。
すなわち (1) 邪教意識 (2) 御利益意識 (3) 聖人(とくに日蓮聖人) に対する意識の問題である。

ここで云う「意識」は「態度」の反復による集中的観念化という程度の意味である。

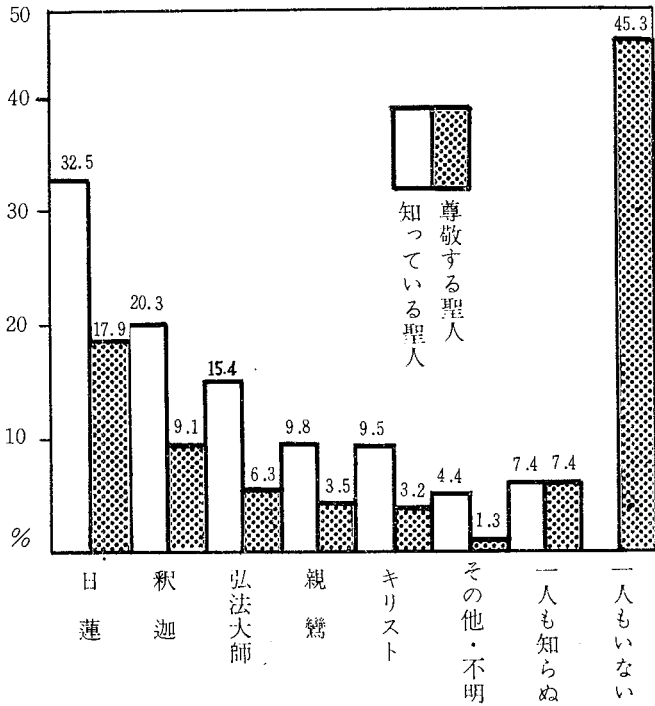
(1) 邪教意識 「どの宗教も正しい」という解答は二二・五%「自分の信仰する宗教はもっとも正しく他宗教は邪教である」という解答は八・四%である。中間的態度として「自分の信仰する宗教は正しいが、ほかの宗教をすべて邪教といったり、けなしたりするのはよくない」とする者が五〇・九%「わからない」は一八・二%ある。創価学会々員一・八%より少ない八・四%が他宗教を邪教であるとしていることがわかる。宗教団体所属信者と非団体信者・非信者に分けると、団体信者二六・二%に対して非団体・非信者の三・二%となっている。

(2) 利益・功德意識、御利益・功德意識は信仰の反対給付であるが、信仰の規定要件である。これについては「しあわせ」になれるかどうかを基準とした。

「かならずしあわせになれる」という全面肯定一九・三%「しあわせになるかも知れぬ」という部分肯定は一八・三%「しあわせになるとは限らぬ」という部分否定は三三・

御利益・功德意識

	かならずしあわせになれる	しあわせになるかも知れぬ	しあわせになるとは限らぬ	信仰しないときと同じ	わからない	計
男	19.2	19.2	32.0	5.2	24.4	100.0 (172)
女	19.5	17.7	33.6	16.8	12.4	100.0 (113)
20代	9.5	12.7	30.2	17.4	30.2	100.0 (63)
30代	19.4	17.2	39.8	7.5	16.1	100.0 (93)
40代	14.5	19.4	37.0	8.1	21.0	100.0 (62)
50代以上	31.8	25.8	21.2	7.6	13.6	100.0 (66)
小学	29.1	10.4	33.3	12.5	14.7	100.0 (48)
新中・旧高小	17.3	17.3	33.8	11.3	20.3	100.0 (133)
新高・旧中	8.7	24.6	36.2	5.8	24.6	100.0 (69)
旧高专・大学	34.5	20.7	24.1	6.9	13.8	100.0 (29)
自営	19.1	19.1	33.8	8.7	19.1	100.0 (68)
勤務	18.8	17.5	36.2	7.5	20.0	100.0 (80)
労務	16.3	20.4	24.5	8.2	30.6	100.0 (49)
主婦	19.7	16.9	36.6	15.5	11.3	100.0 (71)
信仰あり	41.7	21.9	26.0	7.3	3.1	100.0 (96)
信仰なし	7.9	16.9	36.5	10.6	28.0	100.0 (189)
(年収) 20万以下	30.0	20.0	30.0	15.0	5.0	100.0 (20)
20~40万	22.2	18.1	29.2	9.7	20.8	100.0 (72)
40~60万	17.3	17.3	35.8	7.4	21.0	100.0 (81)
60万以上	17.3	20.0	38.7	8.0	17.3	100.0 (75)
計	19.3	18.3	33.0	9.8	19.6	100.0 (285)



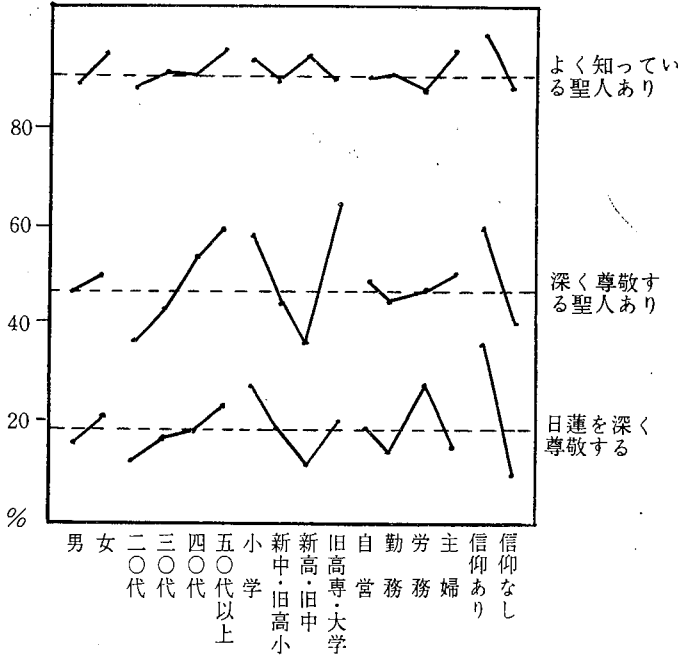
・○%「信仰していないときと同じ」という全面否定は九・八%「わからない」は一九・六%である。全面的、部分的肯定は三七・六%、全面的部分的否定は四二・八%「わからない」一九・六%となる。

この表からひきだされる問題は、信者のなかに部分的否定三三・○%全面的否定七・三%を含んでいること、肯定が低所得層に多く、年取が多くなるにつれて肯定の比率が下がる傾向を示している。全面、部分否定が男より女に多いということも現われている。

(3)日蓮聖人に対する意識この地域は日蓮系の宗教の信者が多いことはすべてにわかっているが、宗教上の「聖人」を十五人ほどあげて知っている聖人△尊敬する聖人▽を調べた。

ここで問題となるのは△知っている▽聖人と△尊敬する▽聖人との差の大きさである。日蓮は圧倒的に多く三二・五%が△知っている▽が△尊敬▽は一七・九%で尊敬する聖人の比率は日蓮宗、日蓮正宗の信者の合計二〇・三%よりさらに低いことを見逃せないのである。非信者

知っている聖人と尊敬する聖人



とあまり変らぬ宗教態度を示した信者のあったことがここでも想いおこされるのである。

上の表が性別、年齢、学歴、職業、信仰の有無による△知っている聖人▽と、△尊敬する聖人▽の比率である。ここで注目すべきことは労働者の△知っている聖人▽△尊敬する聖人▽は日蓮以外は、あまりにも少ないという事実である。

- a 日蓮聖人はおだやかで平和的だ
- b 日蓮聖人は反抗的で好戦的だ

- a 日蓮聖人は慈悲ぶかく心が広い
- b 日蓮聖人はひとりよがりで身勝手だ

この四つの文章は日蓮聖人の人柄（パーソナリティ）についての叙述である。aとbとはそれぞれ反対に対応している。

△おだやかで平和的▽は四五%、否定は一七%△反抗的で好戦的▽は一五%、否定は四三%△慈悲ぶかく心がひろい▽は五六%、否定は一〇%△ひとりよがりで身勝手だ▽は一%、

否定は四五%である。

- a 日蓮聖人は真の愛国者である
- b 日蓮聖人は国家主義者である

a 日蓮聖人は宗教改革家である

b 日蓮聖人は政治的革命家である。

これは思想的傾向（イデオロギー）についての叙述である。

△真の愛国者▽は四五%、否定は一六%△国家主義者▽は二〇%、否定は三三%、また△宗教改革家▽は四〇%、否定は一八%。△政治的革命家▽は一六%、否定は三六%である。

△人柄▽の場合三四%、△思想傾向▽の場合四三%が回答が白紙であることは、判断のむずかしさがあることを意味している。

次の表は日蓮聖人の宗教的性格を示したものである。

日蓮聖人の宗教における魔術的性格を肯定するわけではないが、さりとて近代的、合理的ともいえないという人が多い。逆に魔術的を肯定したものは二〇%以下で「わからない」層が四〇〜四五・三%とひろがっている。

次は日蓮聖人を仏とみるか人間とみるかという態度であ

日蓮聖人の宗教的性格 (%)

	はい	いいえ	わからない
日蓮は合理的で近代的だ	18.9	35.8	45.3
日蓮は魔術的な感じがする	11.9	48.1	40.0
日蓮は信仰上仏様である	35.8	24.7	39.5
日蓮は私達と同じ人間である	62.6	6.6	30.8
日蓮のもつ神通力は信仰の力で	41.5	20.9	38.0
日蓮の強い態度は信仰のあらわれ	45.7	18.9	35.4

(N=243)

るが、「信仰上仏様である」は三五・八%「私達と同じ人間である」が六二・六%であって、「信仰上仏様」であっても「日蓮聖人は私達と同じ人間である」と受けとられているとみてよい。

今までの日蓮聖人を中心としてその意識様態をまとめてみると次の表の様になる。この地域の宗教的風土における日蓮像が、どの様なものであるかがここに示されている。程度の差はあるとしてもなんらかの日蓮像をもって居るのは六六・三%であったし、これは日蓮系信仰者の二二・

日蓮聖人に対する意識 (％)

日蓮聖人を知っている	85.3
日蓮聖人を知っており日蓮像をもっている(1)	66.3
日蓮聖人をもっともよく知っているわけではないがとにかく知っている	52.7
日蓮聖人の<人柄>に好意的	42.0
日蓮聖人の<思想的傾向>に好意的	35.0
日蓮聖人をもっともよく知っている	32.6
日蓮聖人を知ってはいるが日蓮像はわからない(2)	19.0
日蓮聖人をもっとも深く尊敬する(3)	17.9
日蓮宗系全部の信者(3)	22.7

(N=285)

(注) (1) ここでいう日蓮像とは、<人柄>、<思想的傾向>

向/<宗教的性格>のみをさす。

(2) (1)のすべてに対し「わからない」と答えた者

(3) 日蓮宗、日蓮正宗(創価学会をふくむ) 立正佼正会、霊友会

7%をはるかに越えるものである。日蓮聖人の<人柄>、<思想的傾向>を好意的にみる者は多いが、更に他の聖人に対する意識様態と比較した場合更にはっきりとした宗教的風土を理解することができよう。

(附) 「宗教意識と道徳意識」調査から

戦後の文化変容の実態を、宗教意識、道徳意識の側から世代間の差異として抽出しようとして調査を行ったが、これは調査過程での予期せざる障害が現われたため、失敗に終わった。この調査経過を反省してみると、四十代以上の層は、道徳意識からの新しい時代への適応の努力が顕著であり、宗教意識においては、稀薄化現象を起している様である。このデータからは推定的な問題しかひきだせないため、判断はさしひかえることとする。

二、日蓮宗寺院の状況

1、「日蓮宗寺院実態調査」からみて「宗勢調査」に先だってひとつのモデルケースとして行ったこの調査の目的としたものは、(1)日蓮宗寺院の規模 (2)寺院の経営状況 (3)寺院の活動状況 (4)寺院住職の社会的地位とその活動状況 (5)寺院住職の教団に対する要求であった。

調査対象は「宗勢調査」に対する予備調査という性格から、宗会議員・参議全員四十四名、宗務所長全員七十四名その他は無作意抽出二百三十二名を全国から抽出し、全標本数を三百五十におさえた。回収数は九十四票、二六・九%であった。うち集計不能票があったため標本数は八十五

である。この数は日蓮宗寺院教会の一・八%にあたる。

寺院所在地は、都市五二・九%、町寺院一八・八%農村寺院二七・一%である。残り一・二%は不明であった。

現在ではすでに宗勢調査が行なわれているので、寺院の状況についてはこの調査より平均的な数値があるので、特に宗勢調査からもれている問題点をひろってみることにする。

A、△壇信徒増減の理由△

大部分の寺院の壇信徒数は増減がほとんどないことが特徴的であるが、増減の主たる理由は引越しによる移動である。理由を順位別に記すと次のようになる。

「増加の理由」

- 1、分家・地域発展による自然増
- 2、布教等住職の努力による
- 3、住職の個人関係
- 4、檀徒の紹介

「減少の理由」

- 1、地域の衰微による移動等自然減
- 2、創価学会への転宗

全体としては新興宗教等の影響はあまり見られないといふことである。創価学会への転宗の件数も微々たるものと

いえよう。

B、△宗門への意見と布教の問題△

まず布教上に支障となる問題についての見解は次のようなものが挙げられている。

布教上の障害としてあげられたもの

- 1、大衆の宗教に対する関心が少ない
- 2、宗内に紛争が多く、これが一般に知られている
- 3、宗門の予算が少なく、布教費が少ない
- 4、僧侶の布教師が社会に対し勉強不足であり、布教方法は古く、しかも布教内容に統一がない
- 5、布教師に適当な人生、社会問題についての指導書がない
- 6、宗門の本尊がはっきりせず布教方針も統一されたものがない
- 7、兼業をすることはそれだけ布教がおろそかになる
- 8、僧侶の信仰心がたりない
- 9、よい布教師はなかなか地方に行くことをせずまた、布教師養成の機関が貧弱である。
- 10、創価学会々員が多い
- 11、徒弟が少ない
- 12、呪術的信仰をもつもの等……

現在多彩な布教活動を展開している宗門人ほど、布教上の問題が多く反省され発展への焦慮を深めているように考えられる。布教上の障害はそのなやみの表現でもある。

また戦后宗門史上に起った問題の「良かったもの」「悪かったもの」を挙げるよう求めたところ、様々な教団への批判が集約された。宗制への要望としてあらわれたものを示すと次のようになる。

宗政に対する要望

- 1、各宗務所管区に布教センターを設置し統一した布教資料により、現代的布教方法をとり入れた布教をする
また、そのような布教師養成をすること。：18
- 2、課金を適正にし、宗門財政を確立すること。：15
- 3、寺院を廃合して新しい事態に対処するべく強力にする。：10
- 4、利権、派閥争いをなくし、協力体制をつくる。：8
- 5、信賞必罰を厳正にする。：5
- 6、総本山、大本山、本山を解放する：5
- 7、地方によい布教師を派遣する：5
- 8、宗門意識を昂揚する：5
- 9、教師にも選挙権を与えよ：5
- 10、全寺院を解放して能力によって住職を決めよ：3

△悪かったこと▽

有り 八八・二%

無し ○

無解答一一・八%

△良かったこと▽

有り 五四・二%

無し 一〇・五%

無解答三五・三%

という答は宗内の戦後史が多難であったことをものごとくしている。

また宗門僧侶一般への批判としては、

僧侶に対する意見

- 1、信仰心を高めよ：15
 - 2、一般常識にかけたものが多い教養をたかめよ：10
 - 3、法縁、仲間意識はあるが、宗門意識がない。8
 - 4、現代社会をよく認識し、その知識を身につけよ：8
 - 5、給仕奉公を第一として、行学にはげめ：3
 - 6、誤まった密教的思想をなくせ：3
 - 7、日蓮宗の修法をよく研究し学べ：2
- というものがあらわれている。更に寺のあり方については次のような見解がみられる。

寺院のあり方についての希望

1、寺院を地域社会に開放し、社会の中にとけこみ、地域の文化の中心となること：45

2、カウンセラーとしての技術を身につけ、檀信徒又は地域の人のよき相談相手になること：33

3、寺院はすべて社会福祉事業ができるようにすること
：25

4、小寺院は統合して強力にする：15

5、檀信徒の組織をつくれ：10

6、世襲をやめること：6

7、文書伝導を活潑にする：3

以上のような問題点のなかで、現われている見解を総合すると、教団の今後の方向は抜本的改革を必要とするものであると思はれる。ひとつひとつの箇条についての対案によつての解決はほとんど不可能であり、教団の再編を含む改革であらねばならないことが明らかである。

二、「勝浦市における創価学会の

進出状況についての調査」から

勝浦市は昭和三十年興津町、総野村、上野村を合併し三

十三年に市制を施行したのであるが、旧務浦、旧興津町は漁港をもつ町場であり、旧総野村、旧上野村は純粋な農村地帯である。第一次産業就業人口は五七%、第二次第三次のそれは一五%・二八%にすぎない。総野・上野が農村地帯であるとすれば、興津・勝浦は半農半漁又は半商半角の町場である。一方は「在」で、一方は「浜」である。この勝浦市に日蓮宗寺院は五〇ヶ寺ある。日蓮宗がこの地方の住民に深く浸透していることはいうまでもないが、ここに三十八年市議選で、約三五〇の票を得て創価学会からの候補が当選している。この分布は明確に調査できなかったがそのほとんどが町場にある。

農・漁村部で創価学会が伸びることができない理由の第一は村落共同体の経済的、社会的構造に原因している。学会員というと村人にとって異端者である。村のなかに会員があるとすれば、村組織に依存しない非農家か、強固な組織からこぼれおちたものである。その場合でも人格的・道徳的非難制裁をうけなければならぬ。しかし町場では単一な共同体でなく、異質な集団が復合し得るため、都市部ほど創価学会は伸張り易いわけである。

次に問題となるのは低所得層に会員が多いということである。宗教的態度変容は、経済的貧困者ほど容易であると

いいえようか。既成の社会集団に適應し得ない層を創価学会は吸収し新しい組織集団化しつつあるということである。

創価学会の農漁村部への浸透のルートは学会専従者 \parallel 布教師であったり信者であったり(行商人をよそおっている場合などもある)するが、いずれもそれは個人から個人へのルートである。旧寺院の檀信徒との結合は、個人単位のものとして確立されていない。勝浦市の場合もいづれ都市化がすすめば、寺檀関係も変化していくであろう。その場合寺と家ではなく、寺と個人という結合の形が求められることは必然である。しかし伝統的なものとして「講」集団(必ずしも寺と直接関係をもっていない)五十座・題目踊りなどのもつ意味は再評価されねばならないであろう。

—— 諸調査をふりかえって ——

教団を囲む社会的状況は大きな変化をとげつつあるが、それにともなつて教団が変化し得ないため、現在の教団の諸問題が生起しているということはくりかえし述べてきたところである。大衆の意識の内容及びそれを受けとめていく寺院を中心とした教団活動の主体的条件というものをわづかにこの諸調査で摘出し得たであろうか。調査資料の細

部にわたる分析については既刊のレポートを参照して理解されたい。特に日蓮宗寺院活動の実態については多くの問題を含んでいるため紹介を最少限度にとどめた。

今日までの調査においてはみるべきものはなかったともいいうるが、これを基礎として行なわれる今後の寺院活動を中心とした宗内の調査には、教団人の理解と協力がなければ不可能である。調査の問題となる点について要約したわけであるが、これらの資料をどのように読むかはそれぞれの立場によって異ってくるであろう。ともあれここに問題を提起するにとどめる。